

(3) コミュニケーション支援の事例研究

事例 1 「ぼうし、とってください」から言葉がひろがったAくん

対象児 A児（小学部2年生 男子）

当初の様子

乗り物に興味があり、乗り物の絵本を見ながら「バス」、「タクシー」、「オンナ（ホンダ）」、「ビチビチ（三菱）」など、乗り物に関する発話が多い。また、絵本を読んでもらうことが好きで、教師の手を引っ張り、「ほん」、「すわる」と言って教師に絵本を読んでもらっている。発話のほとんどは単語で、発音は不明瞭なものが多い。

発達プロフィール

乳幼児のコミュニケーション発達アセスメント（ASC）

基底伝達構造／要求伝達系 7レベル（21ヶ月相当）

／相互伝達系 4.5レベル（13ヶ月相当）

記号的伝達構造／音声言語理解 6.5レベル（19ヶ月相当）

／音声言語表出 6.5レベル（19ヶ月相当）

保護者の願い

- ・幼稚な発音なので、はっきりとしゃべれるようになってほしい
- ・人とのふれ合いが苦手なので、うまくコミュニケーションがとれるようになってほしい

目 標

- ・単語だけでなく「～ください」という表現ができる
- ・少しずつ明瞭な発音ができるようになる

手 立 て

- ・A児は、警備員さんにもらった制帽が大変気に入っている。その帽子をA児の手の届かない所に片付けることにして、教師に要求する場面を設定する。要求の際には、「△△せんせい、ぼうし、とってください」と言うよう促す。その他、帽子以外の要求の場面においても、「△△せんせい、～ください」と言うよう促す。
- ・教師や保護者とのかかわりの中で、多くの発話を促す。A児の発音が不明瞭なときには、ゆっくりとはっきりとした発音でモデルを示す。
- ・ひらがなをほとんど読めないA児であるが、文字には興味があるようなので、文字を読むことが発音を明瞭にする助けになると考え、朝の会で、自分の名前カードを一文字ずつ読む活動を行う。並行して個別の学習の時間にひらがなの学習を行う。
- ・教師や友だちと楽しくかかわれる経験を増やすよう心がける。

経 過

支援 (◆)

考察等 (※)

児童の学校での様子 (●)

児童の家庭での様子 (○)

1 学 期	要 求 の 様 子	<p>◆大好きな帽子を A 児の手の届かない、教室の扇風機の上に掛けておいた。</p> <p>→ 「ぼーち、ぼーち」と帽子が欲しいと教師に要求する。</p> <p>◆帽子が欲しいという要求の際には、文の構成を意識できるように「△△せんせい（肩を叩く）、ぼうし（帽子を指さす）、とってください（手を重ねて叩く）」と身振りを伴った発話モデルを示すようにした。</p> <p>→ 「△△せんせい、ぼうし、とってください」と模倣する。</p> <p>身振りは定着しなかったが、教師に対し「ぼうし、とってください」という発話が出始めた。7月には、ほぼ確実に発話できるようになった。</p> <p>※発音はやや不明瞭であるが、A 児は即座に音声を模倣し、自分の中でパターンとして身につけることができた。「△△せんせい」と相手に呼びかけて、「ぼうし、とってください」という表現を獲得することを目標とした。</p>
	そ の 他	<p>◆朝の会で「名前呼び」のときに、自分の名前カードの文字（ひらがな）を読む活動を入れる。</p> <p>→文字を指さしながら名前を言うが、音声と文字に対応していない。</p> <p>○父の日にお父さんに「……ト」と言う。「お父さん、ありがとう」の意味。</p> <p>○三菱を「ビチャビチャ」とお母さんが発音すると、アーンと半泣きで「ミ・ツ・ビ・シ」とゆっくりお母さんに教える。</p> <p>○お風呂あがりに着替えをしていると「はんたい、はんたい」と言ってくる。シャツが前後反対になっていたのを直してほしかったようだ。</p>
夏 休 み	要 求 の 様 子	<p>○ 洗濯物の中からエプロンを取り出し身に付け、お父さんのハンカチを頭に乘せている場面で、お母さんに「……（エプロン、しばって）ください」とエプロンのひもやハンカチを縛るよう要求する。</p> <p>○ 「ケーキ、ケーキ」とホットケーキを作りたいと催促する。</p> <p>○ 「くるま、くるま」と言うので、家族でドライブに出掛けた。</p>
	そ の 他	<p>○ 「そーめん、そーめん」と言って、名物の大岩そうめんを食べた。</p> <p>○福光の“ぬく森の郷”という温泉に出掛けた。温泉という言葉が覚えたのか「おんせん、おんせん」と言って喜んでた。</p>

- K先生とのやりとりの中で「ビチビチ (いっぼんばししてください)」と手のひらを差し出して要求する。

◆ 「いっ・ぼん・ばし」とゆっくりはっきりと発音したモデルを示す。

- 「いっぼんばし」とほぼ明瞭に発音できた。K先生が「Aくん、先生にして!」と手のひらを差し出すと、「ちょちょ」などと聞き取りやすい発音で言っていた。

「いっぼんばし」以外にも不明瞭な発話があった場合に、ゆっくりはっきりと発音したモデルを示したが、うまく発音できないものもあった。

※ 構音に関して (聴覚的な問題も考えられるが) 機能的に難しいのか、音の省略や置換も見られた。話す意欲を妨げることのないように、発音することが難しそうな音で構成されている単語については、一度モデルを示す程度にとどめるようにした。

- 学級の生活の時間に石川門へ散歩に出かける。「たこやき、いこーか」と、たこ焼きを食べたいと要求する。

※ 「～いこうか」の表現が見られた。家庭でのやりとりの表現と思われる。

- 9月末、帰宅後に暑かったため「ジュース、ちょうだい」という。その後、今度は「グレープ、ちょうだい」と言うことができ、お母さんに頭を撫でてもらい、にこやかにしていた。

「～ちょうだい」の表現が見られた。

※ 2学期に入ってから「ぼうし、とってください」という表現だけではなく、「【名詞】 + 【要求の言葉】」という二語文の表現が次第に増えてきた。これは、語彙が増えてきたことに加え、「音声 (二語文) で要求を伝える → 要求がかなえられる」という経験によって獲得したのではないかと考える。

- お父さんと二人でドライブしている途中、牛井の“吉野家”の近くを通ると、「ジョシアナ (よしのや) (の牛井、食べたい)」と言うので、二人で初めて牛井を食べてきた。

※ 学校でも「ジョシアナ」という発話があったが、教師はその意味がわからなかった。連絡帳を見て「ジョシアナ」= “吉野家”であることがわかった。

- お気に入りの毛布が夜尿のため、乾燥中に「おかーさん、おかーさん、もう (もうふ) ください」と何度も欲しいと要求する。

「おかあさん」という呼びかけの後、二語文での要求の表現が見られた。

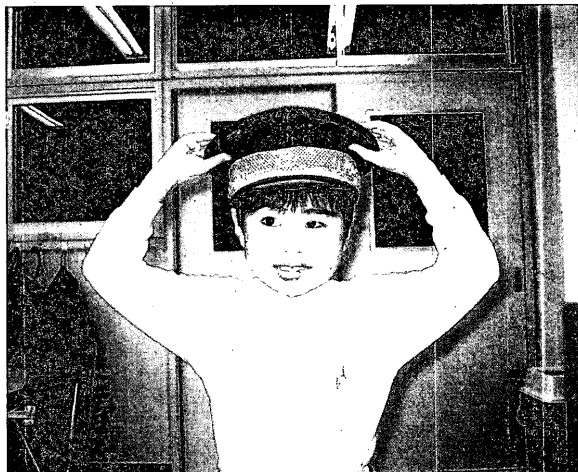
- 給食の場面で、フタのついた牛乳瓶を教師に手渡ししながら「ぎゅうにゅう、ください (フタをあけてください)」と要求する。

◆ 「△△せんせい、ぎゅうにゅう、あけてください」という発話モデルを示す。

- 「△△せんせい、ぎゅうにゅう、あけてください」と模倣する。

「【名詞】 + 【要求の言葉】」の表現は定着したが、【要求の言葉】は場面に適

2 そ の 他 期	<p>した単語を使用していない。</p> <p>● 教師の顔を見ながら「△△せんせい」と言う。</p> <p>※教師の名前を覚え、名前を言いながら確認しているようである。</p>
	<p>● ひらがなの学習も進み、朝の会の名前呼びでは、カードの文字を指さしながら、一文字ずつはっきりと発音できるようになった。</p> <p>● 休み時間に黒板に顔の絵を描き、絵を指さしながら「おとうさん」「おかあさん」と言っている。</p> <p>◆ 人とのかかわりをひろげたいと考え、A児の好きなお父さん、お母さんのお絵描き遊びを始めた。</p> <p>→ A児が「おとうさん」と言い、教師が顔の輪郭を描く。続いて、A児が「めめ」と言い、教師が目を描く。このようにA児が要求し、教師が応えるというやりとりが続き、顔が完成すると満足する。</p> <p>◆ 顔だけでなく、洋服や体、また、A児の興味のあるもの（名札、免許証など）を音声を伴いながら徐々に描き足していくことにした。</p> <p>→ 最初は、教師が描く様子を見ていたが、そのうち自分から描いて欲しいものを言うようになった。</p> <p>※この遊びを通して、人とのかかわりがひろがっただけではなく、言葉のひろがりが見られたように思う。</p> <p>● 大便がしたくて「うーち」という。“家”と教師は思ったが、A児がお尻を触っていたことから“うんち”がしたいのだとわかる。</p> <p>● 2学期の半ば頃から、教師に向かって「ばすてい、いこう」と言い、教師が「行かないよ」と言うと、「はちばんラーメン、いこう」と言い、また教師が「行かないよ」と言うと、次々「～、いこう」と好きな単語を入れ替えながら教師とのやりとりを楽しむ姿が見られるようになった。</p>



帽子がお気に入りのA児



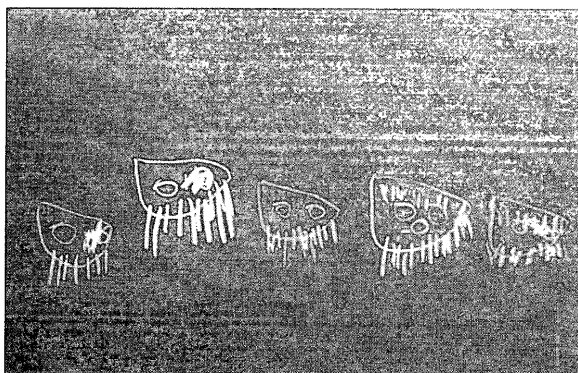
M先生とお絵かき

ま と め

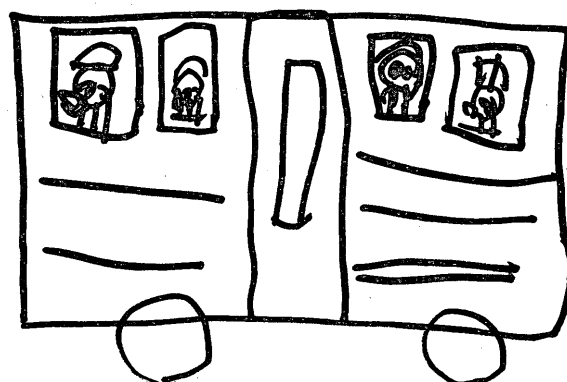
A 児が大好きな帽子を、手の届かない所に片付けることで、教師に要求を求める場面を設定し、教師が発話モデルを示すことを最初の手立てとして実践に取り組んできた。その結果、6月頃、発音は不明瞭であるが「ぼうし、とってください」という表現が自発的に見られるようになった。また、その他の要求の場面でも発話モデルを示すようにしたところ、「～ください」という発話が増えていった。夏休みから2学期にかけては、家庭、学校を問わず「～ちょうだい」「～いこう」などの発話も出てきている。このように要求伝達を意図した場面においては、一語文（単語のみ）だけではなく、二語文（【名詞】+【要求の言葉】）での発話も見られるようになった。これは、A 児の何とか伝えたいという要求の強さ、リーチングや一語文によって自分の思いが伝わるという経験、音声を模倣できる力などが相乗的に働き、二語文を般化させていくことにつながったのではないかと考える。そして、これらの発話のひろがり、教師がA 児の気持ち、意図を探りながら、楽しいかわりを積み重ねてきたことが大きなきっかけになったのではないかと考える。

発音に関しては、明瞭に発音できる単語も増えたが、うまく発音できないものもある。教師が、ゆっくりはっきりとした発音でモデルを示すことを手立てとして取り組み、その効果も見られたが、ひらがなを一文字ずつ指さし発音する（読む）ことも明瞭に発音することの有効な手段であった。この後者は、文字に興味があったA 児にとって、今後ひらがなの習得が進むに伴ってより有効なものとなっていくと思われる。ただ、発声器官の機能的未熟さからか、どうしても発音することが難しい音があるようなので、発音に関する取り組みについては、A 児の負担にならないように、ゆっくりと行っていきたい。

今年度、1学期の後半から2学期にかけて、A 児の言葉は飛躍的にひろがりを見せた。今後、言葉のひろがりによってさらに人とのかわりを経験し、音声言語が、A 児にとって思いをかなえることのできる便利な道具としてだけでなく、コミュニケーションの楽しさを知り、豊かな生活を送る道具となるようなかかわりを求めていきたい。



6月に好んで描いていた人物画



A 児が描くようになったバスの絵

(三宅和憲)